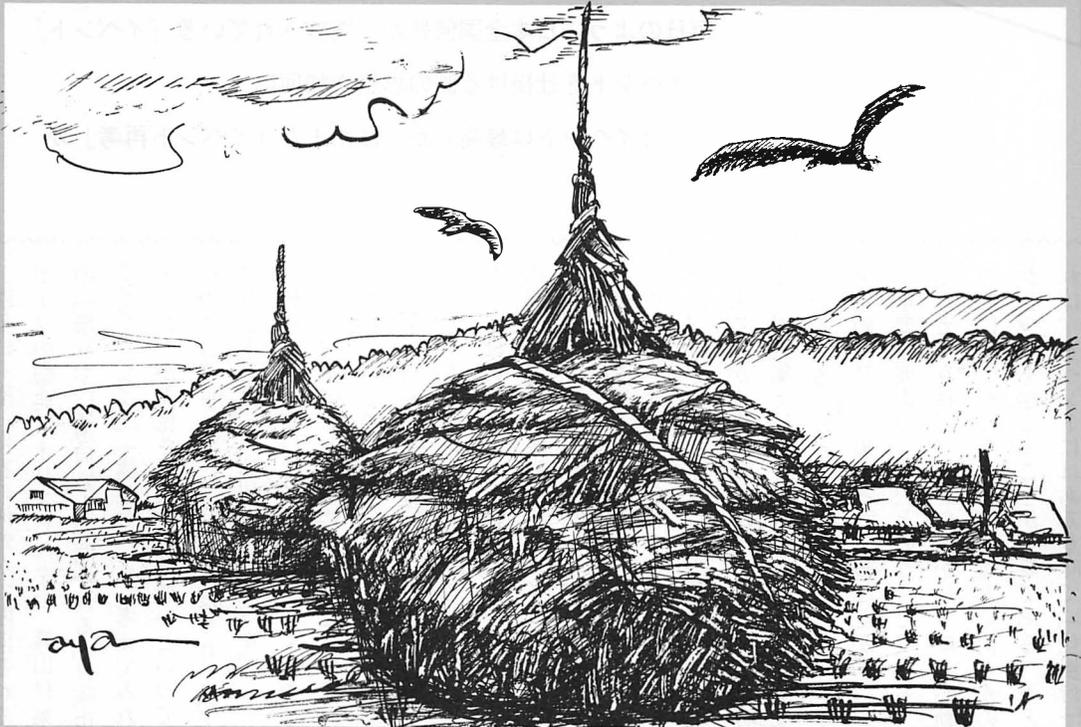


舞 とうん

VOL 26



柳原あや子さん(松山市)作 三間町田園風景「わらぐろ」

特 EVENT タウン 集

- 地域づくりイベントの役割とその効果
愛媛大学教育学部教授
讃岐幸治…………… 3
- 「第20回四国かわのえ紙まつり」に向けて
川之江市/石津真人…………… 6
- 素敵ないかざきを……………
五十崎町/河畠登紀…………… 8
- 「牛の丸焼きパーティー in 小田深山」
小田町/松岡雄二…………… 10
- 地域ふれあい朝市
川内町/片山凌太郎…………… 12
- 手づくりイベントの醍醐味
双海町/若松進一…………… 14

研 修 レ ポ …………… 17

地域づくり・ふくしまフォーラム
地域づくり交流研修 (前編)

ふれあい広場

リレーでちょっとーク …………… 22
〈新居浜市・つくば市から〉

元気印レポート …………… 24

〈こんにちは MOGAです〉
〈カナダ研修に参加して〉

Information …………… 28

TOWNタウン通信

「まちづくり草の根文化講演会」のご案内
まちづくりセンター移転のお知らせ

E V E N T サイコウ!!

毎日のように日本全国何処かで実施されている『イベント』

イベントを仕掛ける側の思惑や如何に

「イベントは最高」か、はたまた「イベント再考」か

四年に一度、世界の何処かで開催されるスポーツの祭典「オリンピック」、農山村集落の「祭り」、毎週何処かで開かれる「日曜日」、「シンポジウム」「講演会」と、考えてみればイベントが実施されない日は無いといっていだらう。世は正にイベントばやりである。イベントとは、一体何なんだろうか。何故、こんなにもイベントがもてはやされるのか、イベントの何処にこれだけの魅力が隠されているのか。

「まちづくり」の救世主が如きイベント。「とかくイベントは、手段であって目的であってはいけない」といわれる。まちづくりの過程でイベントについてよく耳にする言葉であるが、果たして目的としてのイベントは間違いなのであろうか。

イベントは、仕掛けるものでなく人々の心の中に、そして地域社会に自然発生的に生まれて来るのが本来の姿であるとする考え方があつる。百人集えばそこには百の考え方が集まるものである。ただ一つ言えることは、「ひとを集め、ひとが集まる」このことがイベントの重要な要素の一つだということである。良く考えてみれば、ひとを動かし、ひとが動くためには、やはり誰かが何処かで何らかのアクションを起こすことが必要である。だとすれば、イベントにはある意味で「仕掛け」が

不可欠ということになるのではないだろうか。また、「ひとを集め、ひとが集まる」ことのもう一つの意味合いには、住民一人ひとりの意識起こしということが含まれてもいる様な気がする。

誰かが何処かである目的のもとにイベントを仕掛け、興味を持った人が集まって来る。イベントが終われば、仕掛けた人物は充足感に浸り或いは成否について自己反省会を持つ。一方、参加者は感動を覚え或いは評論家となつて批評する。

結果は兎も角、この一つの過程がある限りにおいて、イベントは成功したと言えるのではないだろうか。

今回の「舞たうん」では、「イベントの本質」「地場産業振興型イベント」「地域住民意識啓発型イベント」「過疎地域活性化型イベント」「地域ふれあいイベント」そして、「手作りイベントの醍醐味」について、それぞれの分野で先導的役割を果たしていらつしやる方々に、それぞれ事始めの動機、苦心談、課題・問題点、思い入れなどを誌面で表現していただくこととしました。

イベントに何らかの興味を持っておられる方に一つの参考にしていただければ幸いです。

(編集子)

地域づくりイベントの 役割とその効果

愛媛大学教育学部教授

讃岐 幸治

地域特性を生かした地域づくり

中央と地方の関係に大きな変革をもたらしたのは昭和五十年代であり、シンボリックには神奈川県長洲知事が昭和五十二年に掲げた「地方の時代」の始まりであった。「まちづくり」「地域づくり」「むらおこし」という言葉が使われはじめたのも、この頃からであったようだ。

それはみんなで協働して質の高い地域生活を創造していくこうとする活動のはじまりであった。その特徴とするところは、かつて「近代化の流れ」のなかで軽視・無視されてきた、それぞれの地域の歴史や風土、文化など地域独自の特性を改めて見直し、それを拠り所にして、その地域ならではの個性ある地域をつくろうとする、いや、地域づくりを通して、地域の特性をつくりだそうとする動きとして展開してきたといえる。

出来事から企てとしてのイベント

そうした地域づくりを進める中で、特に住民の意識・行動にユサブリをかけ、新しい流れを生み出すキッカケづくりの有効な手法として注目を集めたのがイベントだったのである。

イベントというのは、ラテン語のエクスー

ウエニウス (eventus) という言葉からきており、「どこから出てやって来る」という意味で、人間にとっては偶然降って湧いたような出来事を意味している。

ところが、最近言われているところの地域づくりイベントには、その背景に人間の「作為」が見え隠れしている。偶然降って湧いたような出来事ではない。本来の意味でのイベントとは違う。

ナポレオンがロシアを攻めて行く時、ある将軍が今攻めるべき状況ではありませんと、作戦に反対した。その時、その将軍に対して、ナポレオンが「何を言っているのだ、状況はおれが作るのだ」と、怒鳴ったという。

この話から、J・ブラスティンは、我々が使っているイベントという言葉は、ある人物がナポレオンのように、意図的に状況を作り出すような仕掛け、行事、催し物等を指すようになったが、神の作り出すイベントの域にはしよせん近づけないという意味で、人間の作り出すイベントを「疑似イベント」と名付けた。⁽¹⁾

したがって、地域イベントというのは厳密な意味では「疑似イベント」であり「企てとしてのイベント」といいいい。

では、なぜ我々は疑似イベントであるイベントを意図的に企てるのか。それは、偶然を、

自然発生を待てないという気持ちと共に、誰かがそれを計画し、企て、あるいは扇動する疑似イベントの方が、自然発生的な「出来事」よりも、意図的な企てとして、より劇的に仕組みやすく、いきいきとしたニュースになりやすいものがあるからである。また思いのままに繰り返すことが出来るし、経費をかけるので、それらを見たり信じたりする値打ちがあるものとして、報道し、拡大し、広告し、賞賛されやすい。さらには理解されることを目的として計画されるので理解しやすく、主催者の都合に合わせて計画されるので、話の種になりやすいなど、多くの利点を持っているからである。

衝撃力としての地域イベント

地域づくりにおいて、人々の関心を引き付ける有効な手段として、こうした意味での疑似イベント起こしが始まった。その意図するところは、基本的には日常的な時間の流れの中に、当然のこととして身を任せていた人々に対して、また地域に対して、一定の衝撃力を与えることを狙ってであった。

なぜなら、イベントが住民に、自分らの地域の実態に驚き、「このままでいいのだろうか」「なんとかしなければ」といった気持ちを作りだす。それが、地域を見直すキッカケ

となり、人々に新しいものの見方、地域への新たな関心をも喚起する。その時から、互いに知恵を出し合い、自分たちの地域の固有の特性、独自の資源の存在を取り出し、自分たちの地域に相応しい、独自の「事起こし」を始める。また、それとの関わりで、自らの存在を再発見し、アイデンティティを確認していく。こうした一定の衝撃力を地域に与える効果を、イベントに期待しているのではないだろうか。

もちろん、主催者がどんなイベントを打っても、それを受け入れる土壌がなかったらどうしようもない。人々の側も、何らかの衝撃を求め、「もう一人の自分探し」の舞台を求めている。昨日までの自分とは違った、新たな自分を求めて「日常性から脱して、一時でもいい、自由に自己表現してみたい」「生きていくのだといった実感や共感を得てみたい」などなど、人々は未知なものに憧れ、驚き、神秘的な味わい、魅力的なロマンを期待し、刺激を求めている。

イベントは、テレビなどのマス・メディアと違って、特定の期間、場所で開催され、その現場に参加でき、五感を動員して直に「刺激」を体感できるパーソナルな双方向のコミュニケーションメディアとして、⁽²⁾「自己表現したい」「新しい自分を発見したい」「燃えて

みたい」とする人たちにとって、「もう一人の自分探し」の格好の機会でもあったのである。

地域に一定の衝撃力を与え、地域を見直すキッカケづくりとしての地域づくりイベントは、「もう一人の自分探し」の舞台を提供するものでもあった。

地域づくりイベントの要件と機能

しかし、イベントはいつも成功するとは限らない。成功するかどうかは五分五分。イベントは経済的に無駄だ、自分を見失う、浪費である、企業金の儲けの手段に過ぎないといった意見も数多くあるなかで、イベントを企画することになる。

イベントが成功すれば、企画・演出者は、周囲の人たちから「賞賛」と「羨望」を受け、自分自身としても「満足感」と「優越感」に浸ることもできよう。しかし失敗すれば、「非難」と「嘲笑」に晒され、「後悔」と「挫折感」を味わうことになりかねない。

地域づくりイベントを効果あるものにするためには、その要件をしっかりとおさえておく必要がある。どのような要因から成り立っているのか。イベントの要件について、城義紀、新藤健一郎の両氏はリングゴになぞらえ、おもしろい表現をしている。⁽³⁾

ア、ニュートンのリンゴ

そこから新しい何かが生まれる。

イ、アダムとイブのリンゴ

使い方によっては、毒にも薬にもなる。

ウ、ウイリアム・テルのリンゴ

正確に的にねらいを定めること。

最も大事なことは、「What」（何をするのか）、どんなコンセプトで、どんなねらいを持ったイベントにするのか、コンセプトが明確でないイベントは成功しない。それぞれの地域の実態・特性に応じて、地域の活性化をねらうのか、イメージアップ・PRをねらうのか、あるいは地域住民の連帯やコミュニティ意識を高めたいのか、教育・文化、または国際交流などの振興を図りたいのか、違いがあらう。そのねらいを正確に定めたイベントにすることである。

さらにいうならば、イベントそのものは期間、場所が決まっており一過性のものだが、それを一回限りで終わらせるのではなく、長期的な展望にたつて連続して効果を生み出すように継続性のある展開を試みていくことも必要だといえよう。

その次に、「How to」（如何にするか）が問題になるが、その場合地域イベントを仕掛けていく者は、多かれ少なかれ、次のような

イベント・プロデューサーの機能を持つことになる。(4)

Creation

ユニークな創造性、企画力

Cultivation

文化的な洗練

Consultation

企画から実施まで、人、もの、金全般にわたる対応能力

Coordination

Coordination

企業、地方公共団体、イベント関係者

者と観客との密接な連携組織能力

Construction

質の高い構力、組織づくり能力

人づくりと地域イベント

イベントの果たす役割として、人づくりの観点から地域イベントをとらえるならば、地域住民一人ひとりにとっては、イベントはまたとない「ロマンづくり」「企画づくり」「仲間づくり」「出番づくり」「課題づくり」の舞台であり、「誇りと自信」づくりの機会に他ならない。とすれば、人づくりの上からは、

こうした点を考慮にいたれたイベントづくりがなされる必要がある。地域住民が企画・運営において主役になって作り出すイベントにすることである。

地域の人たちがそれぞれ地域に対して抱いている「思い、夢、ロマン」を結集して、企画から実施までそれぞれの持味を発揮し、参画していく。相互に刺激し合いながら、自由な発想と独自の知恵を生かしながら、極めて問題提起的なイベントを作り出し、周囲に向かって発信していく。この過程こそが人づくりであり、「もう一人の自分発見・創造」のプロセスでもある。この過程を何よりも大事にすることだ。

社会が急激に変化していくなかで、今日必要とされているのは単なる「問題解決型人間」や「受信型人間」でなく、「問題提起型人間」であり、「発信型人間」である。そうした人間を作り出す人づくりの一つとしても、地域イベントが果たす役割は大きいといえる。

(注)

(1) 「幻影の時代」D・ブーアスティン、星野

他訳 有斐閣（一九九六）二六七―八ページ

(2)(3) 「イベント戦略の実際」小坂善次郎 日本

経済新聞社（一九九一）

(4) 「イベントが日本を変える」通産省商務課編

通産産業調査室（昭和六二・四）一九六ページ

「第20回四国かわのえ紙まつり」に向けて

川之江市 第14回四国かわのえ紙まつり

実行委員会委員長 石津 真人

はじめに

『大いなる可能性と新しい息吹き』第十四回の紙まつりも雨には大変悩まされましたが、無事終えることが出来ました。

さて今回の第十四回紙まつりは『紙未来にかけるドリーム』をテーマに紙まつりの将来を展望しながら実施したわけですが、その中で次のようなことを強く実感しました。それは紙まつりが秘めた「大いなる可能性」と、参加した市民が醸し出す「新しい息吹き」ということです。

『大いなる可能性』というのは、紙まつりがこれまでに培ってきた「人と人のネットワーク」、紙まつりを支えてきた人々が耕してきた「文化創造の土壌」、これらを十分に活かし切ることによっていいモノがどんどん派生してくる可能性を言っているのです。私はこのことが、川之江の未来に大きく貢献すると信じています。

「新しい息吹き」というのは、市民の主体的参加により、我々が

求めていた「自発的な盛り上がり」が出てきたということです。このことは紙まつりにとって大きな意味を持つと思います。その息吹きは「紙おどり」「ふれあいステージ」「フリーマーケット」等に見られました。

反省点

『模索からアピールへ』

しかし、いい面での実感があつた反面、まだまだ力不足を感じました。我々スタッフの「思い」や「意図」がまだまだ市民に届いていないということです。我々のアピール度が弱いということです。我々はこれまでも、催し物をいろいろと模索してきましたが、それを市民に如何にアピールするかという努力が足りなかったような気がします。「市民の共感を呼ぶ紙まつり」を我々は目指すべきだと思いますが、そのためには紙まつ

りの「明確なる方向性」そして市民を十分に堪能させる「骨太の企画」等を考えていくべきだと思います。また、そのためにはある程度長いスパンで物事を見ることも必要だと思えます。今、紙まつりは模索の時代からアピールの時代への転換期のような気がします。





これからの方向について
〈ビジョン・選択・アピール〉

紙まつりは毎回それぞれのテーマの基でいろいろなものを追い求めてきました。十一回「紙まつりを全国区に」を合言葉に情報発信の模索。十二回「結・紙と人」をテーマに「新しい紙文化の創造」というコンセプトの模索。十三回「紙・遊・祭」をテーマにイベントとしての楽しさの追求。そして十四回「紙未来にかけるドリーム」をテーマに紙のまちと紙まつりの将来を展望。まさにそれぞれのスタッフが「今紙まつりに何が必要なのか」を敏感に感じ取り、そのテーマを掲げ実施してきたのです。そして、毎回何かの新しい発見、確かな手応えがあったはずです。そして今我々は、これまでに模索してきたこと、それによって得たこと、そういったものを整理し総合的に判断し、紙まつりの将来像を描くべきだと思います。その時に明確なイメージを描く意味でも、あまり長期ではなく中期的なビジョ

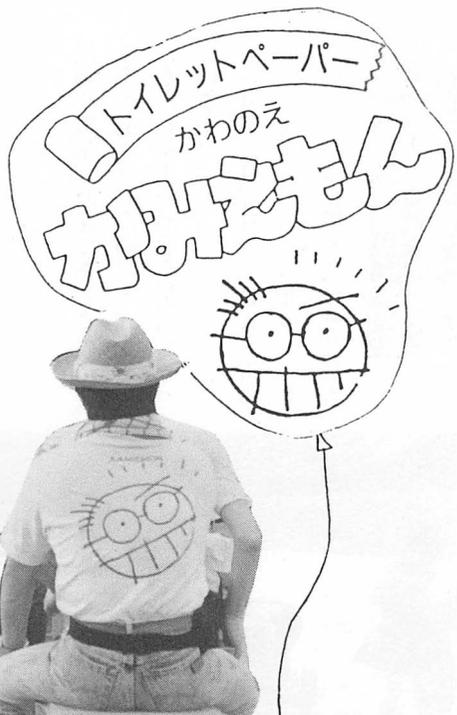
ンの方がいいような気がします。それが「第二十回紙まつりのあるべき姿」を求めることだと思います。

次にやるべきことは、ビジョンに基づき「何をやるか」という「大胆な選択」だと思います。あれもこれでもなく、予算と時間と労力の制限を考慮し、「市民の共感を呼ぶ紙まつり」の実現のためにとという物差しで、大胆に選択すべきだと思います。

そしてやるべきことが決まれば、どんどんと市民にアピールすべきです。その時に必要なのは、ただ市民に知らしめるという消極的姿勢のアピールではなく、「市民の

共感を呼び、感動を与える」という高い目的を掲げ、「市民の心をゆさぶる」ことを目指す位の積極的姿勢のアピールなのです。また市民へアピールする手段として、対外的にいろいろなネットワークを使って情報発信していくことが、大切だと思います。

今、明確なビジョンを描き、大胆な選択をし、積極的アピールをするその時が来たのです。来年は第十五回紙まつりですが、第二十回紙まつりに向けてその力強い第一歩を踏み出したいと考えております。



これが紙まつりが生んだ統一ロゴマークです。

素敵ないかざきを……

五十崎町 町づくりシンポの会 事務助っ人のひとり

河 島 登 紀

「なぜ『イベント』をするの」と質問されたら、あなたは何と答えますか。ここ十年余、全国津々浦々で大小さまざまなイベントが行われているニュースを毎日のように耳にし、目にしています。十秒か二十秒のテレビ映像を見、ラジオから流れてくる「音」アナウンサーの言葉を聞き、そして新聞記事での報道を読みながら、それらの中にはなかなか見えてこない企画側の思いや考えを聴いてみたいとよく思います。

いかざき流地域づくりでは、イベントを明確に位置付けています。素敵ないかざきを創造することを理念に、「美しい自然」「美しい人」「美しいネットワーク」の三つを戦略にし、その為の戦術としてイベントがあります。ここ八年余、地域づくりグループによる各種イベントに参画した体験からも企画する側は「目的」を明確にしておくことがとても重要なことだと実感しています。

具体的なイベントについて紹介すると、美しい自然「小田川」住

民の原風景、財産であるこの川を未来へ引き継ぐためにと、小田川にかかわるイベントをいろいろやっています。

毎月第二日曜日の「日よう市」、地域の人達に小田川へ近づいてもらい、原っぱの風を肌で感じてもらうために始めて七年が経過しました。「水辺の散歩」では、魚、底生動物（水中生物）、野鳥の観察、小田川流域の生態系を子供からお年寄まで自由に参加し遊びながら調べています。来年は、草花調べを計画しています。私達はこれらのイベントの効果を数字で測ることはありません。参加者が何名とか、経済的効果がいくらだとかいう評価はしないのです。そして反省はしますが、失敗はありせん。仕掛人は、このイベントで参加者の一人ひとりが小田川に関心を持ってもらうようになればと心ひそかに願うのです。

又、何百万円かの費用はかけた「川のシンポジウム」は、全国から約三〇〇名の参加者があり、イスから講師を招いて盛大に開催、



「水辺の散歩」

全国版の新聞にも掲載されました。このシンポジウムは二人を元気にするためのイベントであったりするので。もし、シンポジウムに参加した者全員が元気になるとしたらこれだけ全国で開催されているのだから一億総て「美しい人」になっているはず、なかなかそうはいかないものです。これらの他にも「かくや姫共和国まつり」「音楽の夕べ」「映画会」「各地への研修」方法はいくらでも出てきます。それらのイベントを通して「美しい人」が育ってきます。（かく言う私もそのひとり）。地域の風土



お大師まいり

(前列左から2人目、河島さん)

文化が人を育てる。それも子供の頃にどれだけ自然の中に関わってきたかということがとても大切なことだと強く感じています。美しい人を育てるためにも、地域の自然との関係を大事にしたいと思っています。

風土、文化を再認識するイベントに「御祓地区のお大師まいり」、「柵田米を食する会」(おにぎりパーティー)があります、この地域は五十崎町の中でも山間地区で小学校全校生徒数三十名足らず、若者が居ない、病院も無いといった地域です。四月二十一日に行わ

れる「お大師まいり」は明治二年から今日まで戦時中も中止することなく続いている行事です。全行程四時間余り自然の山道を歩き七ヶ所でお接待を受け、まさに自然・人・文化に触れるイベントです。その地域が持っている貴重な財産は大事にして欲しいと願いつ、応援しているのです。「柵田米を食する会」(おにぎりパーティー)は、十二月の初旬、御祓新田地区の柵田で収穫し、稲木で自然乾燥した新米を食べるイベントです。農村風景としての柵田は美しい。しかし、耕作している人にとって機械も使えず労力は沖田の何倍もかかるうえ、収穫も少ない。いろんな面で、柵田がどんどん放置されたり木が植えられたりしている現状です。柵田は、景観の対象だけでなく、自然ダムでもあったりするので。反当り何俵穫れるという経済効率だけの対象ではないというのを改めて教えてくれる「おにぎりパーティー」なのです。豊かな暮らしを感じるのには私だけではないはず。

こうしていろんなイベントが重なり合い、「自然」「人」「ネットワーク」が織り込まれていきます。何年かやっていくうちに、方法論



おにぎりパーティー

だけに目が向いてしまったり、去年もしたから今年もしなければならぬといった錯覚に落ちやすいものであると思います。企画側が楽しくなければ参加者も楽しくないはず。消化事業になりそうなら「休み」をとる勇氣も必要な行動です。マンネリになりそうな時、初めて企画した時の「感動」を振り返って目的を再確認します。それと気持ちの中に遊びをもって

おくこと、資金は原則として自前であることも疲れない方法です。こゝ、八年余やってきてどれ程のことができたか、遅々として進まないので現実です。なにをするにも体力、精神力だけでは足りないものがあり、技術、ノウハウが必要であることも実感しました。地域の人をまき込む技術、イベントを魅力あるものにする技術、資金をつくる技術等々経験を通してながら修得すること、ネットワークを通して各地の「美しい人」から学んでいきたいと考えています。

目指すは二十年か三十年先のいかざき、もしかしたら次の世代かも。目に見えない地平線を想いつ、いろんなイベントに参加していただきたくて、子供達に想いを託しながら「さりげなくしたたかに」

牛の丸焼きパーティー in 小田深山



←中央が松岡さん

小田町 観光協会総支配人

松岡 雄二

■牛の丸焼きパーティー■

十月の第一日曜日、小田深山の紅葉とスキーシーズンの幕開けをPRする小田町の代表的イベントとして、大自然の神秘的な渓谷美の中に佇む「深山荘」を会場に開催されるのが「牛の丸焼きパーティー in 小田深山」である。

このイベントを始めようと思いついたのは、「我がふるさと小田町が好き」ということと、さることながら、日本全国到る所で実施されているイベントには無いものを、みんなの度胆を抜くようなものをやってみようというのがそもそもの発端であった。

また、小田町のキャッチフレーズ『小田深山と銘木の町』が示すとおり、小田深山は小田町のシンボルとして美しい自然がふんだんな地域であることから、この自然を見ながら、おいしい空気と牛の丸焼きを食していただくというのが、イベント開催の趣旨であった。今でこそ、広く認知された感のあるこのイベントも、初回は大変であった。まず人集め。実行委員会のメンバーが、それぞれの知人を尋ねて回るローラー作戦を展開。市町村等への文書発送などと併せ、目標人員を確保したのであるが、参加していただいた方々には、今なお感謝の気持ちで一杯である。七回目となった今回は、今まで以上に宣伝や口コミの

おかげで賑やかなものとなった。

イベント当日は、パンやサラダ、ポテト、コーン等の食べ物のほか、飲み放題のワインやビールもふんだんに用意し、参加者の多彩なご要望にお応えしている。さらに、餅つき大会、「牛引き大会」と銘打ったくじ引きなどのアトラクションも好評となっている。このくじ引きの景品には、深山荘の宿泊券、名物のたらいうどん、名産品の磨き丸太、スキー場のリフト券などを用意して、より一層小田町を知っていただくこととしている。



これがある有名な「たらいうどん」

小田町では、二月の「スキーカーニバル」、四月の「ターゲット・バード・ゴルフ大会」(スキーのオフシーズンを利用し、ゲレンデに十八ホールの専用コースを設置、全県的に解放している)、五月の「マウンテンバイク大会」、七月の「溪流釣り大会」(深山荘)、そして、十月の「牛の丸焼きパーティー」と、春夏秋冬一シーズンイベントを実施しているが、とりわけこの「牛の丸焼きパーティー」

は、小田深山を広く町外にPRし、小田町のまちづくりにも不可欠なイベントになってきたと考えている。

■イベントの裏表■

この「牛の丸焼きパーティー」は、文字通り牛を丸焼きにしたローストビーフをメインディッシュとした野外パーティーである。回を重ねる毎に参加者が増え、今回は五百名の希望があり、準備に当たる実行委員会も大変な盛り上がりとなった。

今年を含め過去七回のうち雨が降ったのは、六回目だけであったが、この時は実施を順延したこともあり参加者が予定の半分となってしまい、こういう時には、野外で実施するイベントの難しさというものをつくづくと思い知らされる。

また、牛の丸焼きを作る作業も大変な苦勞の一つである。



標高八百メートルの山奥ゆえ、十月ともなると深夜は氷点下まで気温が下がることがある。この中で、牛の片身約三百キログラムを、翌日のイベントの開催時間に合わせてじっくりと炭火で焼いていく。夜中から、実行委員会のメンバーが交代で火加減をみながら寝ずの番で、炭火の上でゆっくり回しながら焼いていくのである。

炭火で焼いたローストビーフは、これはもう味も香りも最高。

これに参加していただいた方の目の前でカットし、温かいうちに食べていただく。如何にもおいしそうにほおばっていたかと、それまでの苦勞も吹っ飛んでしまう。イベントをやって良かったと実感する一時である。

■思い入れ■

私は今、しみじみと小田町で暮らしていることを誇りに思っている。

これといった地場産業も無く、なかなか地元に残りたくとも残れないといった状況の中で、小田町で生計を営むことができることに感謝している。その中で、おらがまち小田町には都会的に俗化された賑わいでなく、田舎っぽい賑わいをみんなが一緒になって作っていったらなと考えている。小田町には都会にはない心のふれあいが残されており、いつまでもこれを大事にしていくべきだと思う。

このイベントは、西日本では小田深山が最初だと思っている。

近年、他の地域でも同様のイベントを始めるところもあるが、これからは良い意味での競争を行いながら、我々のイベントの良さをもつともっとPRしていかねばならないと考えている。また、これからの観光事業は隣接の市町村が、連携を取り合いながら進めていくというやり方で実施していくことが必要と思う。自分たちだけのイベントを売り物にするだけでなく、お互いの市町村がそれぞれのイベントの良さを紹介し合いながら助け合っていく、そういうような手法が大切になってくると思う。

最後になりましたが、私はイベント、特に我ふるさと小田町で開催する「牛の丸焼きパーティー」の根底に流れるものは『心の交流』だと考えている。「ふれあい」ということが根底になれば、どんなに立派なイベントを実施しても、決して長続きはしないだろう。小田町では、参加していただいた方々全員がほのぼのとしたふれあいの中で、小田町の「こころ」を感じていただけるよう今後とも工夫を凝らしたイベントを続けていきたいと考えている。

地域ふれあい朝市

川内町 ^{みうち}三内農協組合長

片山 凌太郎



!! 二百四十回ってなーに!!

川内町三内農協が、昭和六十二年四月から平成三年十一月迄の四年八ヶ月間、毎日曜日開催した「ふれあい朝市」の回数です。

「明日は朝市だ、天気は晴れよ」、その日一日雨が降っても、朝市の時間、二時間余は雨が止む、と云うジンクス発生された朝市です。

日曜日の朝は、子供達が手をとなぎ、お年寄りが三々五々、話しながら、又、其の間を自転車、カブ、自動車国道十一号線の東や西から、万国旗がたなびき、民謡が流れる農協広場を目指して集まってきました。

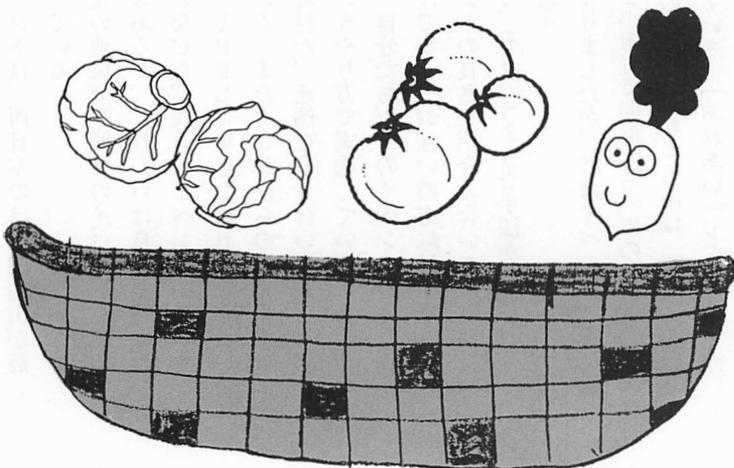
七時三十分過ぎになると、その朝収穫した旬（シユン）の野菜や果物、花等を満載した軽四トラックが、人々をかき分ける様に入ってきて、生産物をパネルの売台に並べ、値段表を大きく書いて貼ってゆきます。八時三十分の朝市販売開始の時間迄は、消費者と生産者の間にネットが張られ、品定めの外は売り買い出来ません。

その時間帯になると、農協スーパーの店舗を開店し、日用雑貨の販売を開始します。会場中央には、四斗釜に、さつま芋のいもがゆのあつあつが出来上り、日曜日の朝の空腹を満たします。間伐材の長椅子では、子供達やお年寄り、親子連れの皆さんが、世間話に花を咲かせながら楽しい一時を過ごします。

八時三十分、生産者と消費者の交流の朝市の開始です。約三十分から四十分で大半の品物は売りつくされます。生産者の方達は、売上報告書を作り、売上金の一部を朝市預金として預けます。

九時からは、兼業農家を主体に

生産資材、肥料、農機具、農薬等の販売を十一時迄行いますが、日曜日を利用しての家庭菜園等の手入れ用品の利用も可成り多いようです。





!!朝市は地域振興のイベントか!!

三内農協地区は、組合員数五百五十人余、平均耕作反別五アール程度で八十%が兼業農家です。その内高齢者が二十一%を超し、年々、地区外の子供さん達を頼って転出して行きます。地理的にも大きく三つの谷に分かれ、一日数回のバスの運行ですが、学校休日にはそれも運行されない過疎地帯です。日々の交流の場所と云えば町の

中心地にある、スーパーか病院か農協程度ですが、それもバスの時間を気にして、あわただしい一時です。

当地区は、昔から味のいい米が出来る土地であり、産出米はすし米「三内米」として、名が通っています。近年は六十二年度に堆肥センターを建て、完熟堆肥の製造販売を取扱うようになりました。農家も消費者に喜ばれる農産物として、新鮮で安全で安心出来る旬の物を提供する気持になり、生協向けの生産物も多くなりました。堆肥は、殆どどの農家が大幅に利用するようになり、製造が間に合わないようになりました。ふれあい朝市を開催する事によって、消費者ニーズを知り、その気持を直接聞くことが出来るようになったことは、大きな意義があったと思っています。今までは三十一〜四十分の売出し時間でしたが、これを三時間位延長して、直販生産者にも五十軒出店して戴き、数量も現在の倍増を願えば、千人以上の消費者に常時利用して戴けるように

なるのではないかと、規模拡大の計画を立て、います。

!!イベントって何だろう!!

「朝市の開催は成功していますね」「職員や役員さんの出勤は、大変でしょうね」「四斗釜の芋がゆのサービスも、経費と人手が大変でしょう」と色々な質問を受けますが、現代の飽食の時代に、本当においしく、安心出来る農産物を、よく知って戴き、選択して戴く機会を持つ場所が、ふれあい朝市と考えています。

私達の生産活動も消費生活も、社会活動の一環として、継続されるものであり、断片的なお祭り行事ではありません。日常生活の洗い直しによって、より良きものを求める機会を、一年周期、一ヶ月周期、一週間周期であっても、毎日の生活の中に、自然に自分達のものに馴じて来るように仕向けるのが、目的だと思っています。家庭、地域、世代、職業間の相互理解と互助の気持ちを発見し育て、創造してゆく勇氣と汗と負担を忍耐強く継続しようと思っています。

ふれあい朝市は、あくまで手段であり、最終的にはこの朝市が、輪島の朝市のように、毎日の生活のサイクルの一部となるよう、目的達成に向けて五百回、千回へと努力してまいります。



手づくりイベントの醍醐味

双海町役場

若松 進一



第一次全国総合開発計画、いわゆる一全総によって日本全国が過疎過密に色分けされ、過疎地域から起こった生き残りのための「むらおこし」運動は昭和四十年代を背景に、味噌・漬物、焼酎・ワイン、太鼓のむらおこし御三家を生み、アンチ東京の自立的発信を始めた。しかし、むらおこしに取り組んだ町村の殆どは行政主導に依存していたためか、それほどの効果を生むに至らなかった。

続いて起きた第二の波ともいわれる「地域づくり」は、人づくり、シンポジウム、イベントを新御三家として五十年代から平成の今日まで、むしろ住民主体による地域おこしとして、ふるさと創生の波に乗って活動は行われてきた。

こうした流れの中で、大は博覧会から小は地域の夏祭りまで、まるでコピーのようなイベントは、華やかに日本各地で繰り広げられているが、なにげなく行われているイベントにも浮き沈みがあり、イベントの在り方そのものに赤信号が点り始めている。

そもそもイベントの源流は戦前、戦後のむらづくりであり、村祭りや盆踊り、演芸会、体育祭、品評会といったレクリエーションや生産活動として村人の生活の中に定着していた。その担い手も青年団や婦人会といった青年、婦人が殆どであった。ところが過疎によつ

て村や町から青年の姿が消えるにつれて古き良き催しは姿を消し、イベントは大人の遊びへと移行、「金は落ちずにゴミは落ち、後に残るは倦怠感」と言われるように、目的のないままのイベントは、参加した人達の間にもネネリと倦怠感を残し、地域の活性化どころか地域離れをおこしている。

こうしてイベントの概略を確認した上で、夕焼けコンサートやほたる祭りなど、私の手掛けたイベントを素材として、手作りイベントのイロハ……や醍醐味について述べてみたい。

① イベントには、博覧会型、観光・地域イメージ型、スポーツ・健康型、伝統行事・祭事・祭り型、産業・物産・科学技術型、交流型、音楽型、文化型、芸術型、学習型、フード(食)型、冒険型、コミュニティ型など、分類に困るほど多くのイベントがある。さしずめ夕焼けプラットホームコンサートは音楽型・地域イメージ型、ほたる祭りは地域イメージ型(アメニティ)といった所だろう。

イベントを企画をする場合「何のために」「何をどのように」「どこで」「誰が誰と」「いくらで」するのか整理して掛からないと良い結果はでない。夕日やほたるを見てアイデアとし、そのアイデアを事業化する企画力が今ほど問われているときはないだろう。単なる

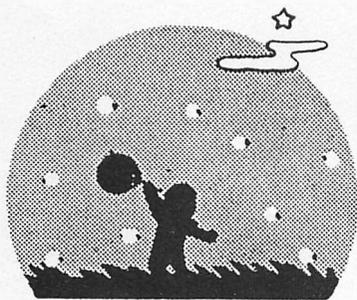
アイデアマンではなく4P(プログラマー、プランナー、プレーヤー、プロデューサー)を持ち合わせた企画マン、キーマンの存在がイベントには欠かせない。

② マンのあるイベントは長続きすると思う。ローカルな地域に住む私達は、都会のまね事よりも都会にないローカルなロケーションにこだわり、ロマンを作り上げて行かなければならない。夕焼けコンサートもほたる祭りも夕日と螢火という光と影の部分をロマンに仕立てあげたイベントといえよう。寅さんシリーズ「殿様と寅次郎」の舞台となった日本で一番海に近い下灘駅のプラットホームを舞台にする奇抜さや、五百個のちょうちん行列、夜空の風船飛ばしなど、参加者の心に感動の余韻を残すロマンの表現は数多くある。

③ ハンディキャップはどこにもある。夕日が沈むだけ、ほたるが飛ぶだけ、金も無く何をしてよいか分からない不安な状況下で、イベントを仕組み育てて行く。そんなハンディキャップの中で、金は無くとも心に夢があることは最高の美学だと思う。金が無ければ知恵が生まれ、夢あれば新しい行動が生まれる。夕日は音楽とジョイントし、ほたるはほたる市を生み地域のハンディキャップを見事に克服、地域住民のハッスルと地域外の人々の熱い期待によって今日までオンリーワンのイベ

ントに育ってきた。

④ ニュース性も大切な条件である。海沿いの暖かさ故、県下で一番早く開催されるほたる祭りは、螢を会場に一匹も登場させないユニークさで、逆にほたるへの想いをアピール出来たし、夜空へ八百個のメッセージ風船を上げる幻想もニュース性抜群であった。また、コンサートでは、土地のないことを逆手にとつて列車の発着するプラットホームを舞台として利用し、町長が列車に乗って会場のプラットホームに降り立てば演奏がスタートする臨場感が話題となっている。



こうしたニュース性は、マスコミという手段を通して広く社会にPRされ、イベントが認知されて行くのである。これからのイベントは、情報ソフトの良し悪しで決まると言っ

でも過言ではない。情報伝達手段としてマスコミ対応の出来ないイベントは広がりも深まりも乏しいものになってしまっただろう。

ホ

ットなイベントが終われば仕掛けた人も演じた人も同じ畳に座して、心の交流をする。単なる慰労会でなく次につなぐプラン・ドゥ・シーの役目を果たしながら感動を分かち合うのである。コンサートに出演したミュージシャン下田逸郎氏が、反省会で若者との交流で熱くなつて町の曲を作ることを約束、次の年『双海恋歌』をブレゼント発表したことは嬉しい裏話であり、来年の火種となつてゐる。

また、ほたる祭には宇和町のホンネ共和国や大洲市の柳沢地区、今治市の乃万地区等、ほたるを志す人達が訪れ、交流の中でほたるネットワークを広げている。

ハ

ルシーなイベントには、理屈抜きで多くの参加者が感動を求めてやってくる。コンサートの場合、現代社会の風潮として、その地域の能力や財力の分相応をはるかに越えた有名人を呼ぶことが流行のようになってゐる。結果は、イベント屋の言うなり、さすがに有名人の人気ばかりが一人歩きし、高い入場券を割り当てられて販売に苦労したりコンサートの良し悪しを何人動員したかで評価するようになってゐる。小さな手づくりのコンサートであっても、音楽を楽しみたいとい

う本来の目的は達成出来るはずである。たった一回で終わるのでなく、継続してマンネリを克服し力を蓄え、伝統の重みを付けなければならぬ。すっかり有名となつた夕焼けコンサートが無料で聴け、僅か百万円余りで運営されていることを知る人は少ない。

ト

レンディな感覚が今ほど要求されている時代はない。まちをどう美しくファッショナブルに表現するか、イベントも同じことが言えよう。そのためには部外者の洗練された意見や指導を受けることも大切な仕事である。夕焼けコンサートは夕日が主役のためことさらの舞台装置は必要でないが、プラットホームに白い布をかけ、花を生けるだけで会場の雰囲気はすっかり変貌する。今年のコンサートに合わせ、花雑誌「FLOWER SHOW」掲載のためのフラワーパフォーマンスが飛び込みで行われたが、専門家の生けた花が出演者とともにスポットライトに映えとてもステキであった。

今後これらテーマに積極的にトライし、夢に見ている「夕焼けコンサート」と「夕焼けのファッションショー」をジョイント開催出来るよう努力して行きたい。

夢なき民は滅びるといふが、人は夢を追うから楽しく、生きがいも感じる。自分の町を愛するからこそ夢が生まれ、夢を形にする手



段としてイベントは人を巻き込み社会を揺さぶる。たかがイベントでなく、されどイベントの気概をもって、まちの元気を回復するためにこだわりのイベントを今後も仲間とともに仕掛けて行きたい。二度とない人生だから……

研修レポート

地域づくり・ふくしまフォーラム

いまふくしまはドレミファティックに

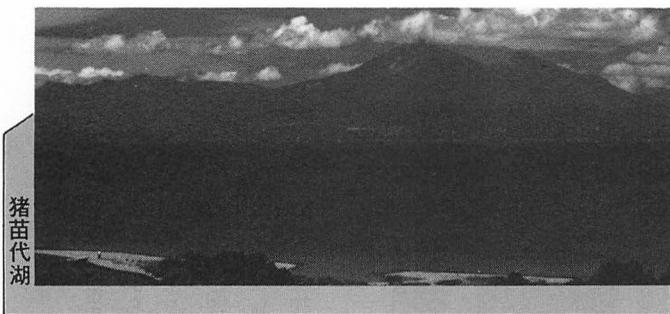
(財)愛媛県まちづくり総合センター 宇都宮 正昭

♪ 兎 追いし 彼の山

小鮒釣りし 彼の川

夢は今も めぐりて

忘れがたき ふるさと



猪苗代湖

目を閉じてコーラスを聴いていると、二十数年前にタイムスリップ。山中でターザンごっこしたり、住み家を作ったり、山賊ごっこしたり、一日中、川

に潜って、魚を獲ったり……。等々、走馬灯のように蘇り、ジーンと感傷気分浸ってくる。

十月末日、「地域づくり東日本会議」が福島県郡山市をメイン会場に開催された。このシンポをソフトラッチに演出してくれたのは、県立安積女子高校合唱部、約八十名のメンバー。(全国大会十一年連続金賞受賞)

シンポには、三十一都道府県、五百余名の地域づくり関係者が郡山市をはじめ四会場に集合した。

今、地域特性を活かしたさまざまな地域づくりの取り組みが、全国的な広がりを見せている中で、地域を取り巻く情勢は大きく変化している。

各地域が抱える共通の課題や特色ある活動の情報交換を目的に、

「我が町の為に何かヒントになるモノはないか」と集まって来た人たちの輝く視線を背に感じながら、

今回のシンポの特徴といえば、メイン会場の郡山、そして福島、会津若松、いわきの四会場を衛星通信を利用してテレビ会議方式を採用していること。各会場の様子を巨大スクリーンに映し、双方向の意見交換ができるシステムである。

最新鋭の情報メディアを活用したこのシンポは、近未来の会議システムの变化を予感させるものがあった。(ある民間企業では既に実用段階に突入)

福島県はイメージと違って、都心から近距離に位置している。現在、新幹線で東京から一時間半、

これが来年新幹線のスピードアップが図られると、なんと、一時間できてしまう。そしてコメの生産量日本一を誇る広大な田園風景を背景に、東北自動車道、磐越自動車道など高速道路の整備も着実に進展。四国も本州と一体となつたとはいえ、まだまだインフラ整備が遅れていることを実感。しかしこれが正に四国の良さなのかも。

●「ふくしまフォーラム」の内容から

四分科会の中で私の出席した郡



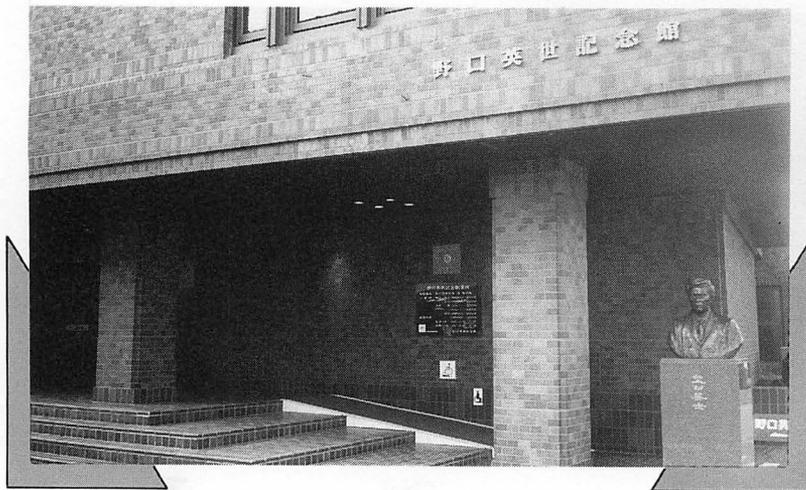
山会場のテーマは

「情報は地方から世界へ」

「物語のあるまちづくり」

ハイレベルなテーマの下、伊藤和さん（街こおりやま編集長）のコーディネートによって個人的なパネリストたちの意見交換が行われた。

（抜粋）



◎菅野典雄さん

（福島県飯館村公民館長）

まちづくりとは、貴重な人生の足元（地域）を見つめて、自分なりにデザインしていく人をひとりでも多くつくる事が最終目的である。その方法として、イベント、文化振興、特産品開発等があると思う。

また、一つの事業を成功させることが目的ではなく、物語性を作って住民に問いかけることが、マスコミに鮮明に映るのではないかと

◎後藤元さん

（ラック計画研究所研究員）

情報の発信と地方の個性化とをどう結びつけなければいいか？

情報化が進めば進むほど地方は個性を失ってくるのではないかと。従って受信側は主体性を持ち、文化水準を高めるべきである。

特産品は地域のイメージ、地域そのものをブランド化して商品に乗せていくという戦略が重要である。

●ひとつの感想として

一般に情報化社会と言われる中で、各種マスメディアによって情報を取り出したものが、勝利者になる可能性が高いようである。

まちづくりにおいても、特にユニークな最新事例の情報を仕入れて、いち早く仕掛けた地域が一般的にまちづくりで有名な地域として見られる傾向にある。

しかし、これらの情報も全て鵜呑みにしてはいけないと思う。まちづくり情報誌に掲載されている地域がなぜ偏っているのか。それは、一面には各編集者にすれば受け売りの情報を活用するのが簡単且つ安全ということが少なからず、根底にあると思う。

ところで、雑誌、テレビ等のメディア情報の中で、全国の65%は東京ブランドで発信されていると

いう。（一説には90%を越えている）

従って情報化社会の中で東京の影響力は益々強くなると思われるが、出来事ひとつ見ても東京以外の地域のニュースが多いのに気が付く。「どうってことないじゃないか」と言っても単に東京コンプレックスに聞こえるだけだろうか。

最後に総括コーディネーターの下平尾先生（福島大学教授）から、「文化、伝統、風土など地域資源を活かした地域づくりが重要であるが、原点は『ふるさとの心』をどのように表現していくかである」と心に残るこゝろがあった。

翌日は、地元の方々の手厚い案内による現地視察。

あの野口英世を育んだ磐梯山と猪苗代湖のまだまだ開発されていない農村風景を味わっていると、「ふるさとの心」が再度、脳裏をかすめてくる。

そんな感動を覚えながら、私の「再訪の地・会津」を後にした。



第六回地域づくり交流研修記(蛭川村の巻)

地域の喜びづくり^に熱くなれ

(財)愛媛県まちづくり総合センター 研究員 上ノ田 誠一

県内の地域づくりリーダーや実践者の養成を目的に、エネルギーシユで個人的な十八名の研修団が、去る十一月十三日～十六日の四日間、岐阜県蛭川村、明智町(日本大正村)、名古屋市(大曾根商店街)を訪問。研修先では、個人的な地域づくりや地域の自立を目指して多様な活動を実践している人達との交流会等実り多く心が熱くなった研修の日々……。ここにその人達との出会い、感動の模様を報告します。

△産業の中心は石、いし、石

蛭川村は、人口約四千人で昔から御影石の産地として知られ、建築土木、造園、墓石用石材として全国に出荷されている。また御影

石と共に、水晶、トパーズ、緑柱石等を初め八十七種類の鉱物が産出され、鉱物の日本三大産地の一つに挙げられている。

村の石材業者は、四十七社を数え年間六十億円、正に石材産業が村の産業の中心といっても過言ではありません。

△行政の心も石なり

役場を訪ねて林村長さんや林企画商工課長さんから行政の心(中心)をお聞きする。

村では、自然(石と緑)を大切にしたい「全村公園化」の村づくりを目指し、その一環として空間美のある石のオブジェロードを元年度～三年度に渡り三キロ程整備。また民間と一体となり「石彫の集

い」を開催するなど石の村からの文化芸術性を追求しながら「ストーングーデン蛭川」づくりを行っている。

個人的な地域づくりは、地域の文化や資源に着目しなければならぬことを再認識させられると同時に、石を含めた山村の文化、つまり心の豊かさをコンセプトに置いていると思われた。

△石の心が伝わる博石館

石の村を象徴する博石館を訪ね水野部長さんの丁寧な施設案内の後、お父さんの代より石材業を営み、現在(株)岩本の社長で博石館館長も務める岩本哲臣さんにレクチャーを受ける。

「外国にある石の文化、伝統が

日本にないのを憂い、観光目的でなく日本の石屋として、石屋が考えデザインした最高の物を造りたい」そんな思いから誕生した博石館。

石のオブジェロードを通り大博石門をくぐると、鉱物を展示する本館やみかげ館、石柱が林立する野外ステージ、五千人コロシアム、一日に石を二個半、つつ積み重ね延々



鉱物を展示する本館



オブジェロード

二年六ヶ月をかけて完成した博石館のシンボルであるピラミッド等、正に石、いし、石……。

石の文化の創造性を追求している石文化の伝承館である博石館は、石の芸術の殿堂であり地球の眠りから覚めた石の息吹や語りがある。石の心を大切にした施設ゆえ、石の心が伝わってくる。それは反面、地球資源や地域資源の有効利用の大切さも伝心しているように思えてくる。

△石の上にも三年

博石館も現在は、年間十六万人が訪れ、村のシンボル兼石文化の情報発信基地となっているようだ



岩本館長さんのレクチャー

が、すべて順風満帆といった訳ではない。

岩本さんは「資金面の困難は、アイデアと自らの労力で補った」と力説する。これは私達も大いに見習いたいもの、そうした努力をしている地域や人が育っている町や村は、地域づくりの先進地となっている。地域に風や波を起こす時の闘志、知恵、汗は地域づくりを志す者にとって忘れてならないポイントであることを改めて教わった。

当初から手づくりで造り始め、造る中で自分達のアイデアが生まれ、その過程で石材加工の特許も何十件と生まれるなど創意工夫を凝らした石の匠の結晶ともいえる石文化公園博石館。

オープンして数年は、赤字で手放すことも考えたが、「石造ゆえ投資額以上に価値がある」と言った友人のアドバイス等もあり、努力の結果、三年目より全国でも数少ない黒字の博物館に育て上げる。博石館を造ったことにより本社の活性化、社員七名の会社から今で



博石館のシンボルーピラミッド

は七十二名の会社へと発展する。

現在も日本で初めての施設、石おもしろ館、石科学館、石歴史館、石の学校の工事を始めている。「石の理想郷ストーンピア」建設の夢は続く。石より堅くて大きい岩本さんの意志とバイタリティー。岩をも砕く意気と熱気を感じる。

△村づくりの原石

数年前、岩本さんが青年部長になると、従来の動きが変わった。村の見直しをきっかけに、村の十ニキロメートルの道路に石のオブジェロードを造ろうという構想や人づくり財団構想、人口一万人の村づくり構想等「ロマン帝国蛭川

村づくり」をやるうと運動を起こし色々と画策「石に火がついた」というビデオを自分達で製作し、町内全世帯や新聞各紙に配布。結果は村で大騒ぎというようになりになり、そうした構想がすんなり受け入れられていない部分もあるが、現在ではその時のプランニングが火つけとなりオブジェロードが出来たりと、徐々にではあるが成果が実りつつある。

青年部自体も仕掛けばかりでなく、石の看板や石のバス停を造ったりとアクションを起こしている。岩本さんが青年部を引いた後も当時の元氣印を引き継ぎ、今は第二段「もう石に火がついたか」と



青年部手づくりの看板

いうプランも出来上がっている。実に住民や行政の揺さ振り方は行動的である。青年部は、岩本さん同様バイタリティーと石（意志）の強い人達の固りである。それが蛭川村づくりの原石であると思えた。

△石の村での交流会

岩本さんより博石館建設の思い入れや青年部、恵那JC時代からの地域づくりに掛ける情熱等のレクチャーを受けた後、村営紅岩山荘で商工会青年部のメンバーも交えて交流会。各々朝早く起きて故郷を旅立ったにもかかわらず、さすが本番の研修（？）。村特産松茸のどびん蒸しや松茸ご飯に青年部メンバーの一人、大橋さん方の地酒で乾杯。各自アルコールの効果よろしく車座になり自分達の考え方や思いを語り合い意見交換……。次第に盛り上がり、皆石のように動ぜず時の経つのも忘れさす。青年部のメンバーは隣りの恵那JCに所属するなど幅広い活動と



ネットワーケを構築している。岩本さんがJCの理事長の時から始めた恵那地方の特産松茸一トン、二万五千本を目玉に、実行委員千人、参加者十数万人規模の「みのりのみのり（美濃路の突り）祭り」イベント等数多くの体験を通して、感性を磨き行動力を培っていることを確信。イベント等を行う中で人が育ってくる話しをよく耳にする。私もそう信じている一人であります。



村づくりの原石である青年部の人達は、行動の中から磨かれすばらしい玉石になっていく。そうそう研修団も各町村の地域づくりの原石（人

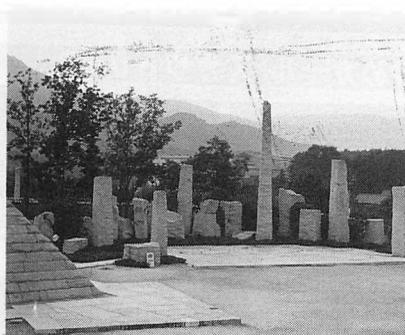
△石（意志）に火がついた

材）。この原石に磨きがかかった石の村での交流会であった。旅は出会いで始まり……。ここ蛭川でも多くの人に出会い色々と教えられた。ストーンプランナーの岩本さんには、特に多くのことを教わった。博石館の建設と同じように、地域づくりもどうすれば可能になるかという発想が大切であり、「出来る出来る必ず出来る」と思えば必ず出来てくる。自分の信じることをやり続ければいいと元気づけられたのは私だけではあるまい。

博石館は、見る施設でなく学び教えられる施設である。また氏のまちづくりと会社経営を織り混ぜた企業文化論の実践の場である。氏曰く「会社経営は、社員一人ひとりの能力をいかに高めていくかが課題でつまるところ人づくり、またまちづくりも一人ひとりの心の満足度をいかに高めるかであり目指すところは人づくりに他なら

ない」と。社員が運営する「喜びづくり委員会」による会社経営と人づくり。心に重きを置いた企業活動こそ氏の地域文化活動であり、氏が考えるまちづくりの原点といえる。心を忘れた会社経営の発展は望めないし、心の触れ合いを忘れたまちづくりもありえないことを悟られる。社員の経験や体験が会社の資産であり「喜びづくりに熱くなれ」が会社のそして氏の motto である。

研修はまだ始まったばかり、ここ蛭川村を訪れて何か石（意志）に火がついた思いがしたと同時に研修生共々地域の喜びづくりに熱くなりたいものである。そんな思いを胸に美濃路の旅は続く……。 (次号へ続く)



石柱が林立する野外ステージ

地域づくりは人づくりから

新居浜市 清水 美里

私が新居浜に来てもう6年になります。といっても、生まれも育ちも新居浜ですから、本当は帰って来たというべきでしょうか。私は昔から都会が大好きだったので新居浜に帰ると決まって、大ショックでした。確かに、子供を育てるには、穏やかな田舎の方が良いかもしれないけど、私の好みの映画はこない、TVのチャンネルは少ない、デパートは少ない。そして何よりも田舎は何かと煩わしくていやだなアという気持ちでした。とはいっても、転勤ですから帰らない訳にはいかないし、来てしまったら、今を嘆くより、積極的はどうしたら楽しめるかを考えた方が良いに決まっています。そんな時ちょうど上の子がガールスカウトに入団し、役が廻ってきたのをきっかけとしてその方面でがんばる事にしました。初めは知らな

い事ばかりで、共同募金で大きな声が出なかつたり、人の前で話すのにオロオロしてしまつたり、大変でしたが、私には勉強になりました。また、公民館が活動場所だったので、ガールスカウト活動が地域への参加のきっかけにもなりました。積極的に参加する様になったのも、そこに集う人達と友達になれたからだと思えます。広報で見ただけではどうしようかと迷うけれど、知ってる人から誘われると参加しやすくなります。

今年から新居浜市では、生涯学習センターが活動しはじめ、生涯学習大学が開校されま



した。私自身もスタッフとしてこの大学に参加しています。市民が求めているもの、勉強したくなるものをと言われ、私自身の興味もあつて「子どもの教育」と「福祉」を考えました。「子どもの教育」についてはPTAの役をした時からいろいろ考えていましたし、「福祉」の講師についてはガールスカウトに没頭したため、ボランティアでしていたお手伝いが出て、今私達に何が出来るかとずっと思つていました。

「福祉」の講師については、心障者センターの方に助けていただきました。「教育」の講師も悩みましたが、友人の紹介でうまく決まり、講座もなんと好評を得て、ほっとしてい

ます。それだけでなく、この講座に参加された方達と知り合いになる事が出来ました。今までもガールスカウトの活動を通して、多くの方と知り合いになりましたが、その方達からなんと多くの事を与えてもらった事でしようか!

新居浜に来た時と全然変わってしまったようです。イヤだと思つていました、今また転動になったら「行きたくない」と思うかも? 私を成長させて下さった方、未熟な私を見守って下さって多くの方々「ありがとう」と言いたい!!

今回は、教育についていい話を聞かせていただいた西条市の三島崇敬さんです。



百將をめざす

自然派ネットワーク 井尻 弘

「これからの農業はおもしろくなる」そう信じて『農』の道を選んで七年、どうしても実戦者になりたく、七年間勤めた農業改良普及所を退職し、現在、百將をめざして、関東（つくば市）を中心に農産物の産直を行っている自然派ネットワークで修行中です。

自分が農業をするなら、どういった農業がしたいか。どういった農業がおもしろいか。決断の答えはそこにあります。

まずは、流通の改善を是非ともしたいと思っています。従来の流通（生産者↓出荷業者↓市場↓卸仲買↓小売↓消費者）では、手取りが少ないだけでなく、生産者の心は伝わらないし、消費者の心も



井尻さん
求められているのは心のつながりだと思

解らない。今、

うのです。消費者と心をつなぐためにも産直でありたいと思つたし、消費者のニーズを確実に把握するために大消費地でありたかつた。

農業にも、町づくりにも共通だと思つのですが、今、重要なのは、地域の枠を越えた発想と行動力ではないでしょうか。私は宇和島市出身ですが、宇和島の中で宇和島の農業や町づくりを考えても、決して大きなジャンプはできない。宇和島の農業を良くしようと思つたら、愛媛全体の農業のことを知らなければならぬ。愛媛の農業を良くするためには、日本の農業を知ることが必ず必要です。それがなければ、この変化の激しい農業情勢の中で決して生き残る事はできないと思つています。地域を知つて、外部の視点がそこに加わつてこそ、地域の進歩と前進がはじまると思っています。

おもしろい農業の実戦に必要なのは、当り前のことですが、まずは農業そのものを

を楽しむこと、そして農村での生活を楽しむことです。今の農業、農村がおもしろくなくなった理由の一つは、余りにも都会の生活を

取り入れようとした、真似をしてきた結果ではないかと思つています。宇和島は宇和島でありたいし、愛媛は愛媛であつて欲しいのです。

今、考えたいのは（都会の住民にはできない）、農業、農村らしさの追及であり、創造だと思つています（決して、都会の生活を模倣するのではなく）。都会にはないものの、緑や自然、おいしい空気、きれいな水、四季折々の顔、そしてゆとりや安らぎ。そういったものを、愛媛を離れた地からじっくりと考えてみたいと思つています。

次回は、重信町（あの「ドテカポチャカーニバル」で有名な）で、米麦を中心に農業をしている牧秀宣氏です。氏は、強力な個性の持

人にやさしい野菜は、地球にもやさしい。



ち主で、農業と農村での生活を楽しんでる。農への哲学と人生の哲学を持つている。お祭り好きである。などなどに於て私の目標とする百將のひとつです。
農業、農村が生き生きとするためには、一人でも多くの、百將が存在することだと思つています。

『こんにちは MOGAです』

～あなたの街を踊ります～

愛媛大学教育学部助教授 牛山 眞貴子



いきなり、とんでもない見出しでごめんなさい。私はダンスグループMOGAの牛山です。職業は舞踊家と愛媛大学教育学部助教授の二足のわらじをはいています。ちなみに私の研究室の上階は讃岐教授です。

先生の爪のあかでも飲まねばならぬほど街づくり等勉強不足でここに原稿を載せていただけのほどの器ではありませんが、愛媛が好きで、大好きで、そのノスタルジアが私たちMOGAの起爆剤になっていることをお伝えしたくてペンを走らせています。

FFCP

これは「フレイ・フレイ・カン トリー・プロジェクト」の略で、

私たちの活動の原点です。MOGAは、ダンスという文化を通して地方から情報発信をしています。

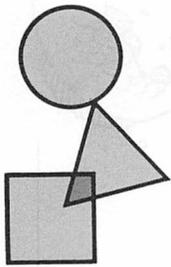
つまり、現在、松山と東京、二カ所での公演活動を行ない、文化は東京が中心であるというつまらない固定観念を打ち砕く流れをつくろうというわけです。事実、東京が文化の中心なんていうのは嘘っぱちで、確かに物がいっぱいあるという点や文化人が住んでいるというところが文化の正しい尺度ならば一理ありますが、必ずしもそうではないと思います。ダンスは、「ものを作る」創作活動です。東京も愛媛も日本、そこに生きていくのは日本人。どこで物を作ろうと良いものは良い。良い物が作れたら、それを運ぶルートを持つていけば、どこでも良い物を作り、送り出すことはできるはずですよ。そう思いませんか？

ピンチとチャンス

MOGAのダンスが独自のおもしろさを持っていないければ、どんな物好きな人でも援助や支援の手は貸してくださいません。まして東京の会場を貸してくださる方なんて現われるわけがない。東京の会場はどれも一日借りるだけで百万円!!冗談じゃないわよ。県民文化会館があつて私たち本当にしあわせ!という具合に、MOGAは東京への情報発信をあきらめるところでした。ところが、3年前、ずっとMOGAの活動を見守っていてくださったラフォーレ原宿さんのお力で東京六本木にあるラフォーレミュージアム飯倉を提供してくださることが決定しました。ただし「MOGAさんならではの良い作品、愛媛の香りをたくさん伝えてください。そして発表会ではなく芸術の公演としての迫力のあるものを」という宿題付き!! その時牛山はまるで二学期を2日前にした小学生のごとく、うろたえました。

MOGAだけの踊りって何？

さきほども書いたように、MOGA独自のおもしろさを持つ踊りである事が大切なのです。MOGAは考えました。そして「故郷を踊る」ことを一つのテーマにとりあげ、それを作品集として、昨年の三月と今年の三月、松山と東京で発表をしました。「つづら道をゆく」シリーズは、現在三作目に入っています。作品になった場所は、「道後・だらだら坂」「石手寺」「古照」「三津浜」「桜三里」「瀬戸内海」です。更に、「石鎚」「面河ダム」が加わり、来年三月二十一・二十二日、東京・ラフォーレミュージアム飯倉での二日間公演、愛媛県民文化会館サブホールでの二月二十九日公演が決定しました。しっかり誌面を借りて宣伝している牛山をどうか許してください。でも、愛媛をモチーフにした作品は、受



け入れられています。それはMOGAだからではなく、愛媛の風土や人の情けが魅力的だからなのです。

まだ、東京に向けてしか情報発信できない未熟もののMOGAゆえ、えらそうな事は言えませんが愛媛は「かなりイイ線いってる」街なのです。

ラフォーレ原宿の佐藤館長は、こう私におっしゃいました。「うち物を売るために愛媛に来たんじゃないんです。服は文化です。文化の情報交換ができる場所として愛媛を選びました。一方通行じゃ交換はできません。どんどん投げてください。」少なくとも、そう望んでいる大きな眼をもった方々が東京にも居ることを知りました。

MOGAの願い

MOGAは、あなたの街を踊りたい。「街」は住んでいる場所という意味であって私たちにとって重要なことは、そこがあなたにとってかけがえのない思い出や生まれ

育った事実が残され、ノスタルジアをかきたてられる場所であるということ。MOGAは、あなたと同じ場所に立ち、あなたと語り、あなたといっしょに見つめながら何かを感じていきたいと思えます。

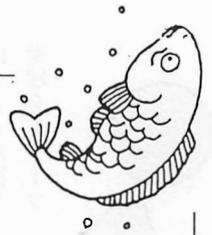
あなたの街で、あなたの街を踊りたい。そして、その作品が熟成したら、それを持って、愛媛からもうひとつの場所へ情報発信していきたい。

それが、私たちダンサーの一番やりたい仕事です。そんなすてきな夢を追えず、生活するために踊ったり、踊りのために夜アルバイトしなければならぬ多くの東京や大阪のダンサーを、私は見てきました。本当にかわいいそうだと思います。早く目がさめればいいのに、と思っています。ノスタルジアがあつて、地域がすてきになることを一生懸命考えようとしている人たちがある。MOGAはそんな愛媛が、本当にイイ線いってると思うし、その中で負けず努力しなければと元気づけられています。ど

うか、MOGAにいろいろなノスタルジアがあることを教えてください。私たちは、100%のエネルギーで、その場所を踊り、そして、もっと好きになっていく想いにつなげていきたいと思えます。

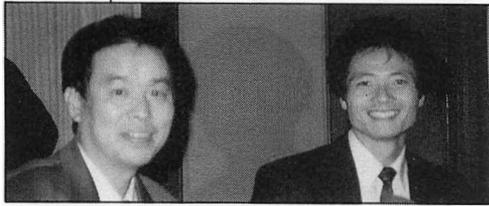
現在、MOGA女性十七名男性二名。オーデイションをくぐりぬけ牛山の鉄拳にもめげず、踊りぬく強者ぞろいの群団です。





カナダ研修に参加して

瀬戸町 木嶋 英幸



総勢七十五名でカナダへ四泊六日の研修。十一月十八日松山空港十五時二十五分発、大阪→サンフランシスコ→シアトル→バンクーバーと四回も乗り継ぎ目的地に到着。サンフランシスコまでの約九時間の機中では、一時間以上も揺られ、酸素マスクの御世話になる者が出たほか、食事時間と重なったため、お茶やお盆を返す人も何人もいた。スチュワードスもこんな揺れは初めてという状況の中、瀬戸の参加者には美味そうに食事をしている者もいたようだ。

そうこうしながらも、何とか皆無事で目的地へ到着。その日の夜は領事館の経済担当の方や現地経済人を招いてのレセプションに参加、カナダの経済情勢や風土、習慣等を聞きながらパーティーを終えた。

四泊とも同じホテルに宿泊し、研修地等へはバスで移動という日程。世界第二位の国土面積と資源の豊富な国であるが故に、自然環境には非常に気を遣うお国柄で、観光バスでありながら全て禁煙、

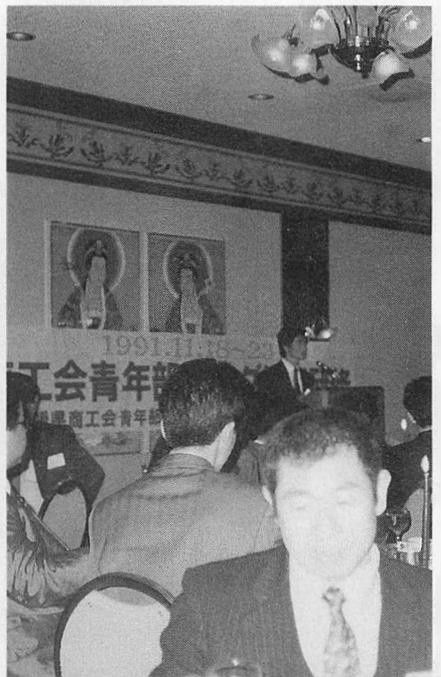
一方では、トイレ完備という日本では考えられない状況であった。タバコを吸わない私は不便を感じることはなかったが、ヘビースモーカー達は非常に困っていたようだった。ちなみに滞在中彼らが一歩よく使った英語は「すもうきんぐOK」だったそうである。御陰で英語が話せるようになったと喜んでいた？

環境と云えば、ビジネス街と住宅地を別な生活空間として考え、仕事とプライベートは完全に切り離していた。ビジネス街は超高層ビル群で、二十四時間灯は消さないそうで見事な夜景であった。これも観光の目玉だそうである。また住宅地は殆どが平屋建かと思えば全ての家には地下室があり、そこに洗濯・物干場と倉庫があると

の事であった。日本ではよく目にする団地の風景が見られないはずである。また殆どの家には芝生が植えられていたが、伸ばし放題にする

ると、罰金との事である。さらに日本との大きな違いは、自販機が無い事、ごみや空缶の投げ捨てがないはずである。こんななまでに自然や環境を大切にすることか感心する。(カナダの人にはそれが当たり前、ごく自然体なのだ)と同時に反省しきりでもあった。ところが、おもしろい事に国土が広く、家と職場が離れている為、車通勤が多いことから飲酒運転には寛大なそうで、運転者の体重によっても基準値が違うそうである……。

カナダに住んで七十年以上という中山吾一氏(九二才・友人のおじさん)に逢い、色々な話を聞く事ができた。氏は牧師でよく日系



レセプションで挨拶する木嶋さん

人の御世話をされたそうである。娘さん（ジョイ小川）も同席してもらいカナダの事を教えていた。二世の小川さんは日本の事を殆ど知らないにもかかわらず、日本人を題材に書いた「Obama」がベストセラーになったという著名人である。直木賞のようなものでカナダとアメリカで五回も栄誉賞を戴いたそうである。また国会では、大臣が「Obama」を朗読し、全国放映のTVで日系人に対し、終戦当時の事を謝罪したそうである。気軽な気持ちで二人に逢った事を現地のガイドさんに話すと、大変驚き、「是非、写真とサインを貰ってきなさい」と言われ、二日連続で足を運んだのだった。

二人を始め何人かの日系人から話を聞いたが、皆カナダが好きで永住したいという人ばかりであった。自然も資源も豊かで、治安もよく、世界中の人々に対し差別なく接待する国民性にただただ頭の下



がる思いであった。

日本との関係も深い。企業訪問をした中の一社、水産加工会社（さけ・数の子等）では、五割を日本に輸出し、北海道の産物として日本に出回っているそうである。日本支社も今年東京にできたそう。帰国十日後に私も商談に行ったのだが、カナダ本社からのアポイントにより、気持ちよく話が出来た。その人達が、カナダを愛し、誇りと自信を持ち、国を大事にし

ようとしている姿に改めて感動させられた。

私も「好きで帰った瀬戸町を誰よりも愛したい。そうでないと町づくりのスタートラインに立てない」とつくづく思いました。ある人が「おしやれな町とは、足を引っぱらず人を引っぱるリーダーが必要、統一した町の景観や文化が薫り、賑わいのある事が条件だ」と言われたのを思い出す。過疎化の真つただ中の瀬戸町ですが、頭脳集団を結成し広域的な視野で物事を見つめる目を養いたいと思えます。

幸い、西宇和郡内の商工会の若手でグループを作っており、できるだけ月一回各町を回りながら話し合う機会を作っている。そして、そこで年間のテーマを決め、その目標達成に努力している。昨年は、佐田岬をできるだけ多くの人に知ってもらおうと四国一円に呼びかけて、「写真コンテスト」を行ないました。朝日新聞社に後援しても

らい、審査は、大阪本社のプロにお願いしました。当初の予定より数倍の応募があり、うれしい悲鳴をあげました。

メロディーラインができ、時間距離は短かくなったものの、まだ行政単位の壁が破れない。そこで我々は、三瓶町朝立を起点に半島の先端まで各所の史跡を巡りながら、対岸の大分県姫島へ行けば幸せがやってくるという「アダムとイブの里構想」（仮称）を女性も交えて話し合ったりもしている。これはあくまで一つのステップと思っている。この地域に残るすばらしい自然や資源を活かしながら全国に向けての情報発信基地として、圏外から外貨を稼ぎ、圏内に還元できるような地元を愛され、一人でも多くの人を雇用できる企業を目指し、より一層努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、近くにおいでの際は、ぜひ、どなたでも気軽にお茶でも飲みに来て下さい。お待ちしております。

Town タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 20

Human Communication & Network



えひめコンピュータ・コミュニケーションクラブ

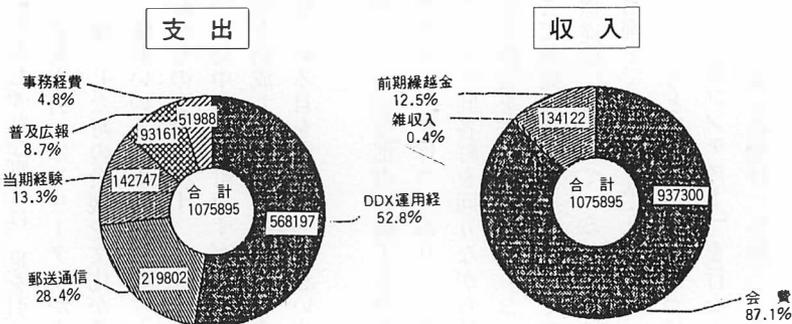
満五歳を迎えて

(財)愛媛県まちづくり総合センターと私達えひめコンピュータ・コミュニケーション・クラブ（ECCC）：通称「エック」が共同でパソコン通信ネットワーク「TOWNタウン」を開局して、十二月二十日で満五歳を迎えます。

「TOWNタウン」ネットは、アメリカで行われている市民の各種ネットワークのような市民のヨコ型交流を、パソコン通信という新しいコミュニケーション手段を活用して、愛媛でももっと活性化できないだろうかという理想を描いてスタートとしたネットワークですが、5年経ってもまだまだ内容的に満足のいくものにはなっていないのが現状です。また、当ネットは俗っぽい言い方ですが、「市民の為の市民の手によるネット」です。私達利用者が会を結成し、ボランティアで運営を行っているため、その活動力には限界があり、みなさんのご理解とご協力なくしては大きな前進は望めないのです。これからの五年間の大きな飛躍を目指して、会の事務局を担当している私達も、会及びネット運営の透明化、ネットの趣旨、性格並びに利用促進の普及広報活動、利用者の声が容易に運営に反映できる体制づくりにと努力していく所存ですので、今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。

（エック事務局）

○ 会の財政（1990年度の決算報告から）



グラフに示すとおり、収入はほとんどを会費に依存しています。支出は、DDX（NNTTのパケット通信サービス）に係る運用経費が約53%と半分を占め、次に会員向け各種案内・郵便物等の通信費、普及広報費、事務経費となっています。

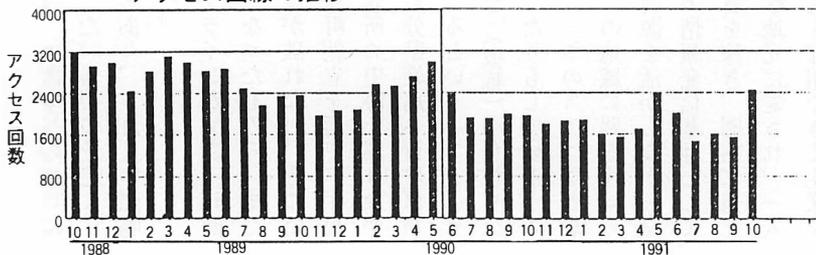
○ 「TOWNタウン」ネットの利用状況

1988年10月から1991年10月までの三カ年分のアクセス回数推移をグラフに表わしてみると、残念ながら三年前に比べて回数がしだいに減少しています。この結果を

率直に受けとめて、私達もみなさんと一緒に真に魅力ある内容にしてい

くため、張っていかないと考えられません。

アクセス回線の推移



お知らせ

「まちづくり草の根文化講演会」の開催について

近年、全国各地で地域の活性化に向け、地域の資源を活用した特産品の開発、各種まちづくりイベントの開催、そして特産品センターの建設などハード・ソフト両面から様々な「まちづくり、むらおこし」事業の試みがなされています。

しかしながら、「まちづくり、むらおこし」活動を取り巻く社会環境は、まちづくりの核となるテーマの選定、地域住民の意識の問題、活用資源など、検討・解決すべき問題が山積しているのも事実です。

そこで、当センターでは、地域固有の歴史、生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めるため、まちづくり先進地の実践者等を招いて『まちづくり草の根文化講演会』を次のとおり開催することといたしました。

つきましては、皆様お誘い合わせの上、奮ってご参加いただきますようご案内いたします。

■ **メインテーマ** 『“夢” “創造” “未来” 魅力あるふるさとづくりを求めて』

■ **主 催** (財)愛媛県まちづくり総合センター、開催地市町村

■ **開催場所等**

◇東予地域

日 時 平成4年2月15日(土) 15:30～
場 所 丹原町 「丹原町福祉センター」
講 師 田村 幸夫 栃木県茂木町役場商工観光課長補佐
連 絡 先 丹原町役場地域開発課 (0898)68-7300

◇中予地域

日 時 平成4年2月28日(金) 18:30～
場 所 伊予市 「伊予市民会館」 4階会議室
講 師 織田 直文 (財)滋賀総合研究所主任研究員
連 絡 先 伊予市役所総務部市長公室 (0899)82-1111

◇南予地域

日 時 平成4年2月29日(土) 15:00～
場 所 宇和町 「宇和町文化会館」 中ホール
講 師 藤原 洋 (財)鉄の歴史村地域振興事業団専務理事
連 絡 先 宇和町役場企画調整課 (0894)62-1111

※ 内容などにつきましては、若干の変更がある場合もあります。

お 知 ら せ



財愛媛県まちづくり総合センターの移転について

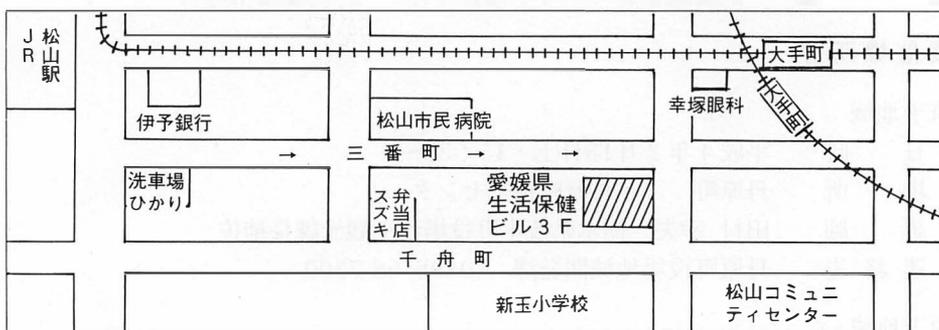
昭和61年7月以来、当センターは、松山市道後一万の愛媛県農業試験場に事務所を構え業務を行って参りましたが、この度、11月25日から下記のとおり事務所を移転いたしました。

所長以下職員一同、新しい事務所で心機一転職務に励んでおりますので、今後とも、なお一層の御指導、御支援をいただきますようお願いいたします。

なお、お近くにお越しの節はお気軽にお立寄り下さい。

記

- 新所在地 松山市三番町8丁目234番地
「愛媛県生活保健ビル」3階
- 電話番号 (0899) 32-7750 (直通)
- F A X (0899) 32-7760



街を歩けば、すっかり師走。
お正月も、もう目の前です。
何かと忙しいこの時期ですが、
「舞たうん」だけは、ゆつくりと
読んで下さいね。

内容についてのご意見や活動内
容についての記事など、お気軽に
お寄せください。

「舞・たうん」編集係

二人のM.S.(毛利・安田)まで
〒七九〇 松山市三番町八丁目
二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL

〇八九九(三三)七七五〇

FAX

〇八九九(三三)七七六〇

発行・平成三年十二月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議